

I 「それだけではなく、御霊の初穂(救いの保証)をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、(主の再臨により)わたしたちのからだが贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています(主の再臨による救いの完成=栄化を待ち望む希望あるうめき、救いの完成を待つ産みの苦しみ)。私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょう。私たちはまだ見ていないもの(主の再臨による救いの完成)を望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます」：23-25。私たちは、すでに主を信じる信仰により救われています(「義認」をすでに受け、「聖化」されつつある)。再臨まで、救いの完成(私たちのからだ贖われ、罪のない栄光のからだに変えられる=「栄化」)を望んで、忍耐して待ち望みたい。その救いの完成まで、この地上では苦悩と戦いがありますが、現在も主は共におられ支えて下さいます。今後、神の時に、主は確実に再臨され、主を信じる私たちの救いの完成と全被造物の真の贖い、新創造による栄光の自由を与えて下さるのです。今、その救いの完成のための希望ある産みの苦しみはありますが、御霊ご自身に頼って主の再臨の希望を持って歩みましょう。

II 「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなししてくださるのです」：26。

1. 御霊なる神は、主を信じる私たちの心に助け主として宿っておられ、救いの完成=栄化の前味を与え、初穂(救いの保証)となっておられます。これにより、私たちの究極的で完全な救いは確実と分かる。
2. この26, 27節の主題は、御霊なる神のさらなる御業です。私たちが、主の再臨による救いの完成まで、私たちは、御国を目指して、この世では寄留者として生きます。その間、何よりも重要なのは、天の父である私たちの神との交わりを保ち続けるすべを知ることです。神との幸いな交わりを保ち続ける大きな鍵は、祈りです。本日のみことばで、祈りに関しても、他の一切の物事と同じように、大きな慰め、励ましが与えられている。主は言われた。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためです」(ヨハネ14：16)。聖霊なる神が「助け主」と呼ばれている。この「助け主」の原語は、「そばに呼ばれた援助者、とりなし手」という意味がある。
3. 「御霊も、弱い私たちを助けて(原語：弱い私たちと一緒にになり、私たちの不安をわたしたちに代わってご自分の身に請け負って下さる)くださいます」とある。私たちの弱さは、肉体から生じることもあれば、虚弱や疲労、不調や病から生じることもある。私たち人間の知性、感情、精神、心、霊、魂は緊密に関係しており、その一つの部分に何か起きれば、他の部分も多種多様な影響を受ける。私たちは、朝目覚めたときに憂鬱な感情を抱くことがあります。普段の仕事をするときも、何かをしようとしても、やる気や力が湧いて来ない時もある。外側で起きることも、私たちに影響を及ぼす。周囲の状況が私たちを失意のどん底に至らせようとしているかのように思ってしまうこともある。その結果、私たちは、鬱状態となり「心の中でうめく」ことになる。そのようなときに、聖霊は、助け主として落ち込む私たちとともにおられ、寄り添って下さり、気持ちを受け止め、助けてくださるのです。感謝!
4. 「私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが」。この祈りのことが、重大な鍵を握っているのは、神と私たちの関係、私たちが神に語り掛け、神に耳を傾けることができる関係こそ、この世で

最も重要だからです。「何をどう祈ったらよいか分からない」ことは、弱さの中では、最も困惑を覚えること、大きな試練である。このみことばで重要なのは、「何を」です。困難な中で「何を」「どう祈ったらよいか」分からない経験を真実なキリスト者はする。深い慰めである。困難な状況で、何を私は祈るべきだろうか。様々な試練、困難に耐えているとき、何もかも自分に逆らっているように思えるときのうめき。困難なのは、正確には何をふさわしく、ある特定の時に必要な分だけ祈るべきか分からない葛藤。なぜ、「何をどう祈ったらよいか分からない」のか。それは、「私たちが自分にとって何が最善で、何が正しいことか理解できず、必ずしも分かっていないため、的外れなものを祈り求めかねない」ことにある。私たちは、御霊の助けにより、自分の状況をより霊的な視点、すべてを支配しておられる神の視点から見つめ始める。主のお取り扱いが正しいと悟られる。主は、私の強さよりも弱さを通して、より多くのことを成し遂げられると気づかせられる。あるものを自分から取り除いてくださいとの神への祈りが、「あるものも神の御手にありますので感謝します。みこころが成りますように」に変わる。私たちは必ずしも自分にとって最善のものをいつも祈り求めるわけではない。自分の物事への理解の弱さを認め、それを主のもとに持ち出し、自分には分かりませんと祈り、事を全く主の御手に委ねる人は幸い。無理やり結論を出したり、ある自分の思いに突進していくよりも賢明である。

Ⅲ「御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです」：26

私たちの心におられる御霊なる神は、私たちの弱さ、何を祈ったらよいか分からない状況、恐れ、困惑を深く理解しておられる。そんな時、御霊は、私たちの助け主、弁護者、とりなし手として、私たちと心で交わり（祝祷の「聖霊の交わり」）、私たちの心に「何を祈るべきかを」優しく教え導き始められる。御霊こそ、色々な状況において何が私たちにとって最善かご存知の方です。私たちは何が最善かを知りません。しかし、御霊はご存知です。私たちが逆境に陥り、うめきを発するしかない時、多くの場合それは御霊が私たちの心におられ、ことばにならないうめきをもって、助け、最善をとりなし（原語：私たちのためになることを願い、みこころに適う願いを神に請願して下さる）ておられるのです。

Ⅳ「人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです」：27。

1. 神は、私たちのうめく心を、完全に探り極め理解して下さる素晴らしく全能の方。人間同士は、互いの心のうめき、つらさを完全には理解できない。しかし、神は私たちの心の状態についてすべてご存知です。神はあらゆる事を支配し、ご存知である。それ故に、私たちが言葉にならない無言のうめきによってしか自分の感情を表現できないような苦境の時も、神は私たちに何が起っているか正確に理解しておられる。私たちの感情、願望をすべてご存知。私たちは真の理解者を求めている。それが神である。神は私たちが自分自身でも意識していないかすかな吐息でも、神は聞いておられる。すべてご存知。人は誰かがうめいているのを聞いても、そのうめきの原因、内容をすべて理解することはできない。助け主なる御霊は、私たちと交わり寄り添い、私たちの心の中のうめきを神にとりなし伝えてくださるのです。
2. 私たちの父である神は、私たちの悩み、うめきを深く理解して神の愛する子どもとされた私たちを支えてくださる。また、三位一体である御父は御霊の思いも完全に知っておられる。ここでの御霊の思いは、御霊が私たちを愛し、私たちの悩み、うめきの中身、感情、気持ち、辛さを理解しておられる思い。私たちは、あまりにも辛く、うめきことしかできない時もある。その時も失望しないで、本日のみことばで希望を持ちたい。心におられる助け主なる御霊が、私たちのために、とりなしてくださるのです。